

第4回 品川区子ども読書活動推進計画策定委員会 会議録（要旨）

日 時：令和元年9月18日（水）10時～12時

会 場：品川区役所第2庁舎 253 会議室

出席者： ◎委員長、○副委員長

| | |
|-----|--|
| 委員 | (出席委員) 本城善之委員◎、島田貴司委員○、豊岡耕一郎委員、平嶋悦子委員、巻島淳子委員、仁平品川保健センター所長、蜂屋戸越台中学校長、守田源氏前小学校長、丸山八潮わかば幼稚園長、石井保育教育担当係長（代理出席）、 大関教育総合支援センター長（オブザーバー） (欠席者) 廣田子ども育成課長 |
| 事務局 | 横山品川図書館長、邑橋事業担当係長、渡辺事業担当係長、菴原事業担当主査、小田桐主任主事、門脇主事、林主事、比嘉主事、青木指導主事 |

傍聴者：2名

1. 委員長挨拶
2. 第三回の振り返り
3. 施設へのヒヤリングの報告
4. 計画（案）について

<主な意見>

委員：未就学児の対象目標はしっかり書き込んでよいと思う。内容的には、読んでもらうというばかりではなく、徐々に自分で読むようになるという段階的な文章にしてもらえるとよいと思う。

委員：未就学児を対象とした施策1の取組③「自然や数などへの関心を高める事典・図鑑等の活用」については、「自然」という大きな概念に対して「数」が並列されていることが気になる。「自然」というのは広がりがあるのだが、並列する言葉も同様のレベル感の言葉が望ましい。

委員：「自然」と「数」という並列には違和感を覚える。保育園で読み聞かせなどを

していると、絵本を通じて自然に関心を持つことはあるが、やはり言葉が先である。読書興味も読書能力も言葉に支えられている。「数」を取り上げるなら、「言葉」も取り上げてもらいたい。

- 委員：中学校で読書活動の支援を行っている、出身校による取組状況の差を感じることもある。中学校の観点でいうと、小学校卒業時にある程度まで読めるようになっている必要があると思う。興味がないと能力も上がらないと思うので、品川区の環境や幼保小連携も含めて、読書能力のラインを保障できるとよいと思う。
- 委員：小学校各校において取組の違いはないという認識であり、課題となるのは家庭の取組ではないかと思う。ただ、学校においても環境には差があると思う。学校図書館はもとより、メディアルームの充実度は違いがあると思う。家読とメディアルームが大きなポイントになると思う。
- 委員：学校に関しては環境の差があると思う。新規図書の購入に差があり、それが調べ学習のための資料に差が出る。そこから見直す必要があると思う。また、学校の規模も違うので、配置する人員についても検討する必要がある。
- 委員：小学生以降の家読は、家庭への押し付けになるようにも思われて、うまくいっているのではないか。家庭が自ら取り組もうとするように、どのようにすればよいのかと思う。低学年はすまいるスクールに通っている、そこでの読書活動にも触れてもらえるとよいと思う。
- 委員：子どもの居場所はぜひ考えられればよいと思う。スペースがないなかでは難しいかもしれないが、学校に居場所がない子どももいる。公共図書館に、親子スペースのような感じで中高生向けの場所があればよいと思う。
- 委員：居場所については、様々な状況に子どもが置かれているなかでは求められる取組だと思う。居場所を意識した事業例はぜひ入れてもらいたい。
- 委員：中学校の立場からすると、施設へのヒヤリング報告で紹介された「図書館部」という取組が興味深い。子どもたちの発想で区立図書館が変わるのもいい。学校でも図書委員のような仕事としてやるのではなく、自由な集まりで取り組むのもおもしろそうだ。
- 委員：学校の立場として考えると、図書部は自主性という点でよい取組だと思う。学校でも区立図書館でもすぐにできる。委員会は仕事だが、図書部はもっとアクティブで自主的なのでよいと思う。
- 委員：中学生向けの施策3の取組③「複合的な情報環境を活用した調べ学習の深化」の「深化」は大切だと思うので、もうすこし内容を書き込んでもよいと思う。
- 委員：高校生世代・大学生世代を対象とする施策4をみると、自ら主体的に思考することが最終目標だとすると、主体的に思考するようになるための施策が必要だと思った。それが、高等学校における調べ学習という「探求」なのだと思う。

本を手にとって興味・関心を広げた上で、最後は自分の意見を言えるようになるための取組が必要だと思う。それがないと目標につながらないと思うので、ぜひ盛り込んでもらいたい。

委員：高校生・大学生世代はボランティアとして活動する機会もあり、活動の様子が来館者の方の目に映るということも大事だと思う。

委員：大学生の観点でいうと、自分で動いてやっていくということになると思うが、行動力に関する書き込みをしてもよいのではないかと思う。それでいうと、目的が思考することで終わってのよいのかと思う。行動も含めなくてもよいのか。問題解決まで含めていけるとよいのだが、目的としては文章がまどろっこしいとは思ふ。

委員：読むことに対する困難さがある子どもについて書き込んでもらったことで、まずは触れることが大事であり、そのための取組が必要だという意識になる。

委員：子どもたちに対して、司書が本を案内するだけでなく、相談役になってあげることもあり得るのではないか。相談に乗ってくれる話し相手になってもらえると、子どもたちも信頼を置ける。親に話せないことを話せるような関係のなかで本につながることもあるだろう。

委員：自分も同意するところである。図書館が場所を設けて来館してもらう姿勢から、図書館が積極的にアプローチする必要はあると思う。何らかの取組を行っていかないとよいと思う。デジタル化が進む世の中では、場所も大事になってくるだろう。

委員：読書は個人のことだと思うが、興味の持たせ方が大事なのだと思う。取組のなかでコミュニケーションのことが多く書かれていることはよいと思う。これまでにはなかった。子どものための計画なので、子どもが読書活動に参加している姿が見えてくるような事業展開をお願いしたい。

委員：読書興味と読書能力を明確に定義したことはよいと思う。一般的には読書習慣、読解力と言われるが、興味のないところには生まれてこない。読書は自主性が大事なので、自主的に読む力をつけ、自主的に読むようになることが大事だ。

委員：目的に「知る」ためのスキルと書かれているが、感性や想像力という観点もあることを踏まえると、認知的なものに焦点が当たりすぎていると感じる。

委員：読書興味と読書能力、複合的な情報環境を活用する姿勢とスキルの3つの関係をどのように整理するべきかと思う。2つの手段と目的なのか。並行して目指されるものではないのかなと思う。

委員：目標はもっと分かりやすい言葉を考えらえるとよい。図についても、読書興味と読書能力の背景についても書き込めるとよいと思う。ぜひアイデアを交換したい。自分は、複合的な情報環境のイメージは様々なので、想像できるような注釈をつけるぐらいのアイデアだが、いかがか。

- 事務局：目標のフレーズがまだしっくりきていない。表現も硬いし、一文で分かりにくい。代替案があればアイデアをいただきたい。
- 委員：調べ学習に特化したものになっている。読書を楽しむことが抜けているように感じる。読書興味と読書能力が下に位置づけられることに違和感を覚える。何かに活用するために読むことにしか焦点が当たってないように感じる。
- 委員：読書をすることで豊かに生きることや、想像力を育むことなど、生きるベースがそれになるのだと思う。そのための読書なのかなと思うので、確かに違和感を覚えていた。
- 委員：複合的な情報環境は今の時代は意識するべきところである。ただ、複合的な環境を目標にするというよりも、背景として位置づけ、違った意味の読書能力が必要になると思う。目標を読書興味と読書能力に位置づけてしまうとよいのではないか。
- 委員：これまでの子ども読書活動推進計画は、子どもの人生を豊かにすることが目標だったと思うが、今回の改定では、それに加えて調べ学習を発展させ、人生の中に取り入れていくようなことも目指そうということなのだと思う。人生を豊かにすることと、自ら学び、考えるということが車の両輪のようなイメージなのではないか。
- 委員：メディア社会はもはや止められないので、両輪という意見には共感するところである。

5. 事務連絡

第5回目の会議は、1月にパブリックコメントで意見をいただいたあとの開催となりますので、2月を予定しています。

以上